
テク × 2 (テクテク)

沢崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テク×2（テクテク）

【Nコード】

N6115Y

【作者名】

沢崎翔

【あらすじ】

テクテクと、ただ歩く。

たったそれだけのことが、一生忘れられない思い出になる。

それが、100kmハイク。

これは100kmを歩く中で、様々なことを感じ、成長していく人たちの群像劇（になる予定）です。

感想など頂けたらうれしいです。

2011年11月19日(土) 14:00

リアル100ハイ開始と同時に連載スタート↓「ボーイスカウト東京連盟」 「100kmハイク」で検索。

1 歩目：100ハイ×ペーゴマ

24時間以内に100kmを歩いたことのある人が、一体どれほどいるだろう。

…まあ、僕はあるけど。それも、2回。

100kmっていうと、マラソン2回分よりも長い。東京から熱海まで行けてしまうほどの距離だ。

それだけの距離を歩くものだから、ゴール付近になるともう、一歩踏み出すたびに足の骨が粉々に砕けるような激痛に襲われることなんか当たり前。

ゴールした後だって、その場で着の身着のまま眠り込んでしまう人や、痛そうな顔をしながら足にできたマメを潰す人もザラにいる。

休憩所に広がるその光景は、まさに戦場の野営病院を彷彿させるほど凄惨なものだ。

それだけのダメージを体に与えるほど過酷なイベントだから、当然後遺症もひどい。

完歩から一週間以上経っても杖なしでは歩けない人や、中には足を疲労骨折してしまう人もいる。

幸い僕はそこまでひどい後遺症に悩まされたことはないんだけど、たまに長時間立ち続けていたりすると、左足首の外側が痛くなってくることもある。たぶんそれも、後遺症の1つだと思う。

じゃあ、一体何のために？

完歩したら100万円がもらえると、テレビで取り上げられて
有名人と会えるなんていうおいしい要素なんか一切ないのに。

そんなに辛い思いをしてまで、一体僕は、何のために100km
も歩くのだろう？

…わかんない。何でだろう？

いや、特に深い理由なんかないんだよ、きっと。

だって、嫌だろうがなんだろうが、歩かなくちゃいけないんだも
ん。

それが、100kmハイク。

都のボーイスカウト連盟が毎年11月に開催している、かなり狂
ったイベントだ。

だって24時間で100kmも歩くんだよ？もちろん、寝ないで。

「狂歩」と書いて、「100ハイ」と読みます。…なんてね。

さて、少し話が脱線してしまったけど、そもそもそんな面倒くさ
くて辛いイベントに、何で僕は参加しなくちゃいけないのか？

実はそれは、僕が大学で入っている部活と関係がある。

それが、ローバークルー部。

ちよつと変わった名前の部活だけど、要するに「ローバークルー」
っていうのは、ボーイスカウトの大学生バージョンだと思ってくれ
たらいい。

そんな聞き慣れない名前の部活に興味本位でなんとなく入ってし
まったのが、運の尽きだった。

実はこの部活、都のボーイスカウト連盟に加盟している。

だから当然、連盟が主催する100kmハイクには、加盟団体の
一員として参加しなくちゃいけないのだ。

ああ、2年前、かわいい女の先輩たちに唆されて入部届にはんこ
を押してしまった自分を殴り飛ばしてやりたい！

…まあ、今さらそんなこと言ったって仕方がないんだけど。

とにかく、早くこのアンケートを埋めなきゃ。

そう、申し遅れましたが僕ことなかいただひろ中井雄浩は今、今年で3回目を迎
える100kmハイク——通称100ハイに関するアンケート用紙
を前に、もう1時間近くも無駄にうだうだ考え込んでしまっている
のだ。

「目指せ、100ハイマジック！あなたがラブを咲かせたい人は
だ〜れ？ぜひ×2指名してちょ〜（も・ち・ろ・ん、「さきこ」っ
て書いても大歓迎だよん？）」

…イタい。イタいよ、咲恋。なきこ

名前もイタいけど、この質問のテンションはもはや読むに堪えないよ。

「恋が咲く」という名前を付けられてしまったばかりに、「わたし、今まで恋なんか咲いたことないもん！」と開き直ってみんなから憐もりのさみに満ちた失笑を誘うのを得意とするのが、僕の同期である森野咲恋きこという女の子だ。

そんな彼女だけど、今回の100ハイでは部活の代表者として、連盟の人たちといろいろやり取りをしている。

更に彼女は今回の100ハイで、誰もがうらやむ「ある権利」を握っている。

それはローバー部員なら、一度は乱用…いやいや、願わくば使わせて頂きたいなあと思うもの。

…100ハイで一緒に歩く、男女ペアを決める権利だ。

そう。100ハイは原則的に、男女2人ペアで歩く。

真夜中に人気のない田舎道を歩くこともあるから、安全上の問題のため、夜間に女の子が1人だけで歩くことが認められていないのだ。

だから女の子が歩く時は、必ず男とペアになって、一緒に歩かないといけないというルールになっている。

…これで何かが起こらないわけがないじゃないか！

実際、僕の1学年上に当たる女の先輩なんかは、2年前の1000ハイが終わってからしばらく経った後、ペアを組んでいた男の先輩と別の意味でゴールインしてしまった。本当にうらやましい限りだ。

生まれてこの方、女の子とデートしたことさえない僕としては、1000キロを歩くだけで彼女できるんだったら、足の1本や2本くらい、全然潰したって構わないと思う。

それに付き合うには至らないまでも、1000ハイの前よりもずっと仲良くなるという男女ペアはけっこう多い。

やっぱり、1000キロを24時間以内に歩くという極限状態の中では、普段はだらしがなくていい加減な男だつてどこか頼もしげに見えるし、いつもはうるさくて小憎らしい女の子でさえ、不思議とかわいく見えてしまうものなのかも知れない。

そしてそういった数々の現象を、人は俗に「1000ハイマジック」と呼ぶ。

結局、それが目当てで1000ハイに参加するという人も少なくないんじゃないかと、僕は思っている。

ていうか、そうでなければ僕たちは、ただ頭が狂っているだけのDM集団だ。

そんなわけで僕は今、今年の1000ハイのペアを決めるかも知れないこのふざけたテンションのアンケートに、ある女の子の名前を書こうかどうか、真剣に悩んでいる。

シャーペンを置き、頬杖を突きながら窓の外の景色をぼんやり眺める。

10月の常盤松大学ときわまつだいがくのキャンパスは、2週間後に迫った大学祭の準備に追われる学生たちの姿で賑わっている。

僕が今座っている所からは、お揃いのパーカーを着た何人かの集団がダンスの練習をしている光景が見て取れた。

みんなしてベーゴマのように、忙しそうにくるくると回り続けている。

一体あの人たちは、何が楽しくてあんなにぐるぐる回っているんだろう。

まあ、そんなことを考えたって仕方がないか。

あの人たちからすれば、僕が1ヶ月後に100kmを歩こうとしていることだって、意味がわからないことだと言い出すに決まっている。

でも、今回の100ハイは、僕にとって特別な意味を持つ。

——「今年の100ハイ、一緒に歩いて下さい」

そう言った彼女の言葉が、さつきから頭の中で何度もリフレインしている。

本気で言っただろうか。でも、もうかなり前の話だもんなあ。

…そうだよ、忘れてるに決まっている。

何期待しちゃってんの？

止めときなよ。どうせ、またイタい思いをするだけなんだからさ。

過去のトラウマが、僕の右手にその子の名前を書くことを躊躇させる。

でも…。

もし彼女があ那时的約束を覚えてくれていて、このアンケート用紙の同じ項目に、僕の名前を書いてくれたとしたら…。

ため息をついてから、再びシャーペンを手に取る。

書こう。…いや、やっぱり無理。さつきから、そんな堂々巡りの繰り返し。

本当に情けない。結局僕は、いつもこうだ。

2回も完歩したくせに、いざ恋愛となると、最初の一步さえ踏み出すことができない臆病者なんだ。

はあ、君のアンケートを見ることができたらなあ。

…ねえ。

君は本当に、僕の名前をちゃんとここに書いてくれたのかな？

…
かなで
奏
ち
や
ん。

1歩目：100ハイ×ペーゴマ（後書き）

はじめまして、【1歩目】を読んで頂き、ありがとうございます。

さて、物語中に登場する「100ハイ」は、実在しているイベントです。

そしてこの話は、僕が実際に100ハイに参加した経験をもとに書いています。

だから「足を疲労骨折するなんて、そんなバカな」と思っている方、
事実です。

ウソだと思ったら、100km歩いてみて下さい。

…冗談です。

さて、この物語の主人公の1人である中井さんが100kmの道を歩き出すのはもう少し先の話になりますが、どうかその日が来るまで、読み続けて頂けたら嬉しいです。

2 歩目：豚×クラT（前書き）

【2 歩目：豚×クラT】

2 歩目：豚×クラフ

あおきかなで
青木奏ちゃんあおきかなでは僕と同じ部活で1つ下の後輩に当たる、ちょっと変わった女の子だ。

「豚を食べに来ました。ここ数日、もやししか食べてなかったんで、
そう言って、彼女は何の前触れもなく、ひょうひょうとした様子で現れた。」

その日は地域の大学生ローバーが何人が集まって、幼稚園くらいのボーイスカウトのこどもたちに、豚の丸焼きを振る舞うというイベントの日だった。

常盤松大ローバーからは役員である僕と咲恋やましろ、それに2年生の松山哲まつが参加することになっていたんだけど、まさか奏ちゃんが来るなんて。

そんな話全然聞いていなかったから、僕はすっかり面喰らってしまった。

「ありがとう、奏ちゃん！来てくれて」

そう言って、咲恋がはしゃいだ様子で話しかける。

「ねえ、聞いてよ、奏ちゃん。他大の子がメールでさ、『オレ、今日バイト入ったの忘れてたわ』…お前、ふざけんなよ、ジーザス！って感じでさ。ちょうど困ったところだったんだよね」

「マジですか？よっしゃ、豚が1人分浮いたぜ」

そう言って、奏ちゃんが小さくガッツポーズを取る。

ああ、この子、絶対に何か勘違いをしている。食べるだけじゃないんだよ？僕たちが焼くんだよ？豚を。ちゃんと働いてくれるのか、なんだか心配になってきた。

やっぱり、彼女はどこか変だ。何かがみんなとずれているようにしか思えない。

女の子なのに、しゃべり方はどこか男っぽいし、おしゃれにも全然無頓着なようだ。

最近は暑いからって、上はダボダボのTシャツのヘビロテ。しかも今日は、よりによって高校時代のクラスTシャツの日かよ。もう何回見たことか。ドクロのマークが背中に描かれた、紫のクラT。

そんな格好で、平気な顔して新宿や渋谷の街中を出歩くんだもん。恥ずかしくないのかなあ。今日だって、他大の人たちもたくさんいるのに。

こんな感じで、化粧品を買うくらいなら一週間豪勢に肉を食べ続けるって言い切るのが、青木奏という女の子…って、あれ？

おかしいなあ。女の子っぽい要素が、1つもないぞ？

「ねっ？見てよ、こどもたち。たくさんいるでしょ？みんなかわいいよねー」

「えっ、こんなにいるんですか？参ったなー、わたし、こども嫌いなのに」

性別不詳な奏ちゃんが頭を掻きながら面倒くさそうに言う姿を、遠目から見つめる。

…ああ、あつた。女の子っぽい要素。

長い髪。しかも、墨をこぼしたみたいに黒くてきれいなストレートヘア。

それとコントラストを描いて際立つ、白くて透き通った肌。

そしてどこか醒めた印象を抱かせる、切れ長の目。

「まあ、豚だけ食べて、さっさと帰ればいいか」

がくつ。せつかく人並み外れてかわいく生まれてきたのに、中身の方はもつと人並み外れているからなあ。

彼女が普段何を考えているのか、本当によくわからない。

そんな彼女のことを「火星人」と呼んで煙に巻く人も少なくないけど、僕は嫌いじゃない。

むしろ、うらやましいとさえ思ってしまう。

彼女は、ちゃんと自分を持っている。

常にふらふらしながら生きている、僕とは違う。

僕も彼女みたいに、堂々と自分をさらけ出すことができたらなあ。

…いや、でも、さすがにクラTを着る勇氣はないな。

まあ、落ち込んでいても仕方がない。時間になって、メガネをかけた男の人が集合をかける。どうやら、彼が今日のイベントの責任者らしい。

いくつくらいだろう、少なくとも、大学生のようには見えない。

集まった大学生スタッフにいろいろ指示を出すんだけど、その異様に高い声が耳にまわりついて、かなりうっとおしい。

しかも妙に馴れ馴れしくせに、言っていることがイマイチよくわかんないし。本当に大丈夫なの、この人？

それでも、豚を焼く台座を組み立てる手際の良さは、お見事と言っしかなかった。

難しいのに、炭に火を点けるのだって、3分もかからなかった。どうやら、彼のボーイスカウトとしてのスキルは、本物のようだ。

「すごいでしょー？あの人、夏目さんなつめって言うんだけど、間瀬田大ませただい学がくローバーのOBさんで、今はプロのスカウトをやってるんだって」

「…で？今はどんな仕事をしてるって？」

「えっ？だから、プロのボーイスカウトだってば」

「ねーよ、そんな職業！」

要するに、ただのニートじゃん。やっぱりヤバいな、あの人。あ
あいう大人にだけは、なりたくないな。

2 歩目：豚×クラフ（後書き）

ローバークルーはボーイスカウトの大学生版ということで、こういった活動も行っていました。

他にも地域のこどもを連れてハイキングをしたり、餅つきをしたこともあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6115y/>

テク×2（テクテク）

2011年11月21日08時49分発行